物と心（承前）

山田次郎

かくて、經驗的にはあくまで繼起的と云ふより外ないと思はれたところの、かの刺戟的（物的）事態並びにそれに引き續く生理的（物的）過程と感覺的性質の（心的）出現との間の關係も、實はそのやうな經驗的事情が或る自體的な物的相應者の或る感覺的心的狀態に對する同時的存立といふことを、少くも決して拒むものでなく、寧ろ積極的にその想定を促すものであるといふことが明らかとなつたと思はれるが、それではそのやうに同時的と考へられる所謂自體的な（生理的）物的事象と感覺的心的狀態との間の眞の關係は、今少しく具體的にいかなるものであるであらうか。それが同時的に表裏するといふ風に考へられる限り、それは一種の所謂無時間的な構造の關係と云ふべきかにも思はれるが、若しさうであるとすると、感覺的性質の（それ自身としての心的狀態ならぬ）意味的な「外化」に成り立つとしての經驗的外界物に卽する一種の所謂構造的關係と比較して、その異同はいかに考へられるであらうか。

例へば眼前に一枚の紙片がある。或る視覺的性質の、單獨にそれ自身としてはあくまで非空間的に心的な生內容であるものが、行動的に實現せらるべきそれの種々の變樣やさては觸覺的性質の種々相の如きものを意味的に限り無く指示することに卽して、空間的に或る距離に或る形と大いさをもつものとして存立する所に成り立つところの、それは一箇の物的生內容である。現實の或る性質的存在態から想像的な他のそれらへの行動を介する意味的指示の無限の可

能性に於いてそれは一箇の物的實在であり、現實的性質のその單なる現前態に盡きるところの所謂心的狀態からはその點に於いてあくまでも區別されなければならぬ或るものである（例へばそれが私の單なる幻覺の如きものでないことを私はそれの意味的に約束する所のものの或る實現によつて確めるのである）。而もそのやうな行動を介する感覺的性質間の意味的關係といふものに於いて、その何れが實際に現在的基底となり何れがそこから未來的に指示せられるものとなるかといふことは、この物のこの物としての外界的存立に何ら關はる所が無いと考へられる。云ひ換へれば、一般にこの種の外界物は、行動を條件とする感覺的性質間の（或る現實性を基底とする）假言的連結の無限の重疊の上に自己の安定を保つ或るものとして、その假言的連結の重疊のその無限性にそれの所謂實在性は成り立ち（經驗的現實態はそれに對し單なる一面的限定として「現象」的である、現はれる「もの」の「現はれ」に過ぎない）、その經驗的現實態がその種々の變化を通じて一々行動的な理由乃至說明をもつといふ意味に於けるその安定性にそれの所謂實體性が成り立つのであつて、そのやうに一々所謂原因としての補償的說明をもつてのみ變化するものとしての經驗的現實態は、それに對して所謂屬性たるものとなる。かくてこの實體・屬性といふ一種の構造的關係は、畢竟右の事態に於ける一方の自己保持性と卽する他方の變化の行動的回復可能性――云ひ換へれば（個々にはあくまで時間的な）變化の方向的相對性――といふものに於いて、その所謂論理的に構造的な無時間的（空間的）性格といふものを得て居ると考へられるのである。

而も、外界物の外界物としての性格がさういふわけで結局感覺的性質間の行動を介する（その限り時間的に順序的な）或る相互關係といふものに卽して成り立つてゐるといふこの事柄は、決して單に自然的外界物についてのみさう

であるに止まらないのであつて、例へば右の一枚の紙片が更にその化學的成分にまで分析せられ、やがてはその物理學的窮極要素にまでも分析が進められるといふ場合を考へてみても、形式的には全く同じことなのである。卽ち、凡そ何らか外界的に經驗の對象となる限りの物的事象といふものは、その經驗的追究に對しては、あくまでも唯その物に關する感覺的感受(性質的相異態)間の或る(行動媒介的——時間的・數的)關係の法則性を示すのみであつて、その經驗的追究がたとひ如何程技巧的に間接化して行つても、この原理的事情に變化無く、唯そこに顯示される右の關係的法則性が益〻精緻の度を加へてゆくといふことのあるばかりである。從つてその同じ事は、所謂生理學的經驗の對象としての身體內部的物的過程の場合についても亦、勿論同樣に適用されるのであつて、例へば生理學的對象たる限りに於けるかの神經過程の如きものをとつてみても、一種の外界的物的過程としてのそれの本質は、あくまでも唯、當の生理學的實驗觀測に於ける感覺的感受間の——云ひ換へれば、體驗の性質的轉化間の——或る法則的關係としてより外に示されやうは無いのである。云ひ換へるならば、その物の物としての眞の所謂自體は、そこに差當り唯、右の如き經驗的關係の汲み盡し切れぬ可能性としてのみ、經驗に對するその不可到達性を示しつつ存立するのであるより外ないわけである。固より生理學的追究である以上、感覺的な所謂心的(乃至それと不可分に「行動」的)結果との間の關係が絕えず顧慮せられなければならぬ意味に於いて、單に物理學的な若しくは化學的な追究とはおのづから相違する所がなければならぬとはいふものの、神經過程のあくまで一種の外界的物的過程としての闡明である限りに於いて、その追究は結局やはり物理學的乃至化學的な分析と同じ方向に歸趨せざるを得ないと考へられ、總じて外界物の外界物としての闡明は、それが畢竟感覺的異質態間の行動媒介的關係(の法則性)の追究であるといふ原理的に遍通

的な事態に於いて、おのづからさういふ同一の方向を取らざるを得ないと思はれるのである。

ところが、一般に經驗的に追究せられる外界物、從つて又當然生理學的對象としての神經過程の如きものまでもが、さういふ風にあくまでも體驗の感覺的相異態間の或る「關係」といふものに卽して成り立つてゐるのと反對に、上に所謂自體的な生理的物的事象として、何らかの感覺的性質の心的出現と全く同時的と考へられた神經過程といふものは、云ふまでもなくその當の感覺的性質の端的な心的出現そのものに卽して——他の感覺的性質への關係に卽してでなく——考へられてゐるのでなければならぬのである。

してみると、ひとしく神經過程とは云ふものの、生理學的な經驗的追究の外界的對象である限りに於けるそれと、感覺的性質の心的感受（心理學的內省）に卽してその背後に自體的に考へられるそれとの間には、明白な差別があると考へられなければならぬ。勿論自らの同一意識に關して云へば、既に述べた事情から前者は自體的に後者に對して必ず何程か過去の段階である外ないと考へられるのであるが、假に——現實的同一意識の外に他の想像的意識の設定に於いて——感覺的性質の心的感受と眞に同時的に相應する物的事象としての神經過程が別途にそれ自身生理學的觀察の對象となり得る場合を想像してみても、既にともかくも生理學的觀察の對象である限りに於ける神經過程といふものは、それのそのやうな經驗的外界物としての存立のためには、必ず或る感覺的性質、從つて又それと卽する或る（自體的）神經過程といふものを、當の觀察者自身の大腦皮質に於いて豫想し、そのやうな感覺的性質間の上述の意味に於ける或る「關係」に卽してのみはじめて考へられる（具體的「形相」に於いて成り立つ）一種の物である意味に於いて、この種の物のこの種の物としてのいかなる分析的追究も、感覺的性質そのものの眞の同時的相應者としての

神經過程に關する眞の（自體的）聞明とはあくまでも緣が遠いと云はなければならぬ――と云ふのはつまり右の意味に於ける經驗的神經過程は所謂自體的神經過程に比して感覺的性質の心的感受に對するその關係が一層間接的であると云はねばならぬからである、卽ち、經驗的に追究せられる限りの神經過程といふものは、何らかの感覺的感受との相應性の次第に緊密を加へる方向へ如何程その追究が進められるにせよ、當の感覺的感受に對してそれが尙時間的に先行するものである間は勿論のこと、たとひそれと全く同時的である場合を想像してみても、旣にそのものの經驗的存立といふこと自體が必ず或る感覺的感受とそれの或る關係附けといふものを別に豫想してゐるのでなければならぬ意味に於いて、總じて感覺的感受そのものへのそれの關係はあくまで間接的と考へられなければならぬからである。

卽ち上來の所述をもう一度顧みて、何らかの感覺的性質がその直接の現前態に卽しては非空間的に心的でありながら、他の可能的乃至想像的な感覺的性質に對する、限り無い意味的指示乃至約束に卽して――同時に或る程度の存在的變貌を伴ひつつ――空間的に物的である時、そのやうな感覺的性質がそのままその外界物に歸屬して外的に存立してゐると考へられるのは、單に自然的に素朴な――若しくは何らかの程度にまで科學的な――立場に於いてであるに止まり、感覺的性質といふものを、右の如く意味的關聯的に（行動を介して）外界物を構成するとしてのその粗笨な（「實用的」）抽象性に於いてと反對に寧ろ外界物の同一的存立から或る程度獨立な變樣性をもつ底のその豐富な具體性に於いて顧みる時、それとその外界物そのものとの間には、實は私の身體に於ける刺戟的事態並びにそれに續く或る生理的過程といふものが介在してゐることが考へられなければならず、而もその所謂刺戟的事態並びにそれに續く生理的過程といふものに關しても、やはりそれを一種の外界的物的事象として經驗的に扱ふ限り、全く同じ事が云

へ、總じて何らかの外界物とそれの經驗的直接態との間には、常に私の身體的事情といふものが介在して、その關係が間接的であることが考へられるのであるが、之に反してその經驗的直接態を成す何らかの感覺的性質の心的感受そのものは、それとの變化の呼應性を次第に精密化する方向に沿ふいかなる生理學的經驗的追跡をも原理的に超え出るところの或る自體的な生理的過程と考へられるものに對して、もはや右の經驗的外界物に關する如くそれとの間に意味的指示とか身體的事情といふものを別に介在せしめることなく（何故ならばそれ自身その身體的事情そのものである）、從つてここに於いてはじめて、その意味に於ける一種の物と或る心的直接態との間に、眞に窮極的なもはやこれ以上を考へやうの無い直接的關係が――その積極的な具體相は尙不明のまま乍ら――成り立つてゐるといふことが出來るわけである。

而して右の如く考へる時、感覺的心的內容の所謂物的基礎たるものとしての神經過程の闡明に關して、それをば一種の外界的經驗的事象として扱ふ限りに於ける所謂生理學的（心理學的）方法といふものが、原理的に或る制限をもつてゐるといふことが考へられざるを得ない。何故ならば、その生理學的（心理學的）方法といふものは、一種の外界的經驗的事象としての神經過程に對する（若しくは「に於ける」）何らかの、同じく外界的に經驗的なる規定が、或る感覺的直接態の（心的に內在的な）出現や經過をば、如何樣に制約するものであるかといふことに關しては、確かに或る程度までその間の法則性を明らかにすることができるのに相違ないとしても、元來神經過程そのものに對する、それの經驗的認知としての心的直接態の關係が、右に述べた事情に於いてあくまで間接的であり、外界的經驗的事象として闡明せられる限りの神經過程は從つてその（經驗的）本質をば、あくまでも唯それに關する感覺的に性質的な

體驗間の行動を介する或る關聯としてより外に示しやうの無いものなのである限り、神經過程の眞の所謂自體的本質がそこに永久に不可到達的であることは勿論として、感覺的心的內容に對するそれの相應的關聯といふものさへもが、おのづから、その一種の物的過程に關する外界的經驗的な規制乃至規定に關聯してのみその相應性をみるといふ制限に於ける或る粗大さ（認識に關する「實用的」抽象性）以上には、その闡明を進めることが原理的に阻まれてゐるわけである。この事は神經過程を外界的經驗的事象として追究する限りどうしても逃れることのできない制限である。ここに於いてか、神經過程といふものをつまり自體的に——卽ち、別に再び何らかの神經過程を介しつつ、感覺的體驗間の或る行動的關聯として（外界的間接的に）考へるのと反對である意味の直接性に於いて、從つて又感覺的心的狀態との間の眞に精密な相應性に於いて——明らかにするために殘る方法としては、唯、その當の感覺的心的狀態そのものへの能ふ限り直接的に周到な純心理學的（非「實用的」）反省に卽して、そこにおのづから浮び上がる（想像的惰性的效果）ところの或る形式的法則性を以て、そのまま類比的にそれの所謂物的基礎としての或る神經過程そのものに擬するといふことより外に無いといふことが考へられるのである。——私はかやうに考へることによつて、かの「形態心理學」に於ける或る種の主張を一應理解し肯定することができるやうに思ふのであり、それと同時に、よく批評の對象となるかの「形態性」の物心兩界に亙る一種の曖昧な形式性といふものについても亦、おのづからその由つて來る所をよく理解することができるやうに思ふのである。のみならず、この後の事柄に關してはもつと深く、物と心とが實は所謂自體の概念を通じて（この事が實は曲者である）歸一乃至連續するといふことが考へられるのであつて、その事を——右に所謂物心間の窮極的直接關係といふものと關聯して——次に考へてみようと思ふのである。

感覺的性質の直接的（非空間的心的）感受態が、それとの間に變化の最も精密な相應性をもつ筈である（一種の空間的物的事象としての）大腦皮質的生理過程の所謂自體的（原理的に經驗的把握の彼方なる）存立に對して、通常の經驗的外界物に關する感覺的性質がその外界物の「自體」に對するとは異る或る窮極的な直接性に於いて立つと考へられることは上述の通りであるが、所謂物的なるものと心的なるものとの關係がここにその緊密の極に於いてあると考へられる此の事態に於いて、その所謂窮極的直接關係の眞相は今一層仔細に立入つていかなるものであるか。

通常の經驗的外界物に關しては、その經驗的知識の內容を成すものは歸着するところ感覺的性質間の或る——行動を介する時間的相關——關係であり、その感覺的性質と當の外界物そのものとの間には質は私の身體といふものが介在してゐると考へられるのであるけれども、この種の知識（理解）の生に於ける役割が本來行動の指導にあるところから、それらの感覺的性質もおのづから或る（所謂「實用的」）抽象性に於いてのみ考慮せられつつ、その限り（物の外界的同一性との撞着無く、その安定性に卽して、それら自身所謂外化乃至物化することにより）右の介在者は特に意識に上るといふことがない。——この事は、經驗がその素朴な自然態を出て例へば物理學的に技巧性の極致に達した場合を考へてみても、形式的にはやはり同樣に保たれてゐると考へられる（物理學が、所謂微視的世界の測定に關する細緻な思索に際してさへ、一般に相異性の認知に關して測定の營みと到底切り離すことのできない身體的事情云ひ換へれば生理學的心理學的事情といふものを、別に考慮に入れて居らぬといふ事實は、從來の自然的な所謂巨視的立場からの惰性を考慮し乍らも、傍觀者に差當り奇異の感じを禁じ得ないものであると思はれる——この疑問に對して

は後にもう一度觸れる機會がある)。

物は、一言で云へば、感覺の約束に於いて、物である(感覺こそ實質的に充實したものであり、又、約束といふ如き「觀念」を物の重さにそぐはぬと考へる者は例へば單なる「疑惑」が生に於いて或る場合如何に切實なものであるかを省みよ)。場合によつて感覺との關係は高度に間接化するにせよ、ともかくも感覺から出て可能的に(可能的意識に關して)再び感覺へ歸つてくるといふこと(の現在意識)を離れて、物の存立はたとひそれを言ふとしても全く無意味であるより外はない。單に自然的に經驗的な外界物についてさうであるばかりでなく、化學的乃至物理學的に分析された微細な物質要素の場合にせよ、生理學的對象としての身體的過程の場合にせよ、又それへの刺戟的原因の場合にせよ、同じ事である(唯關係が間接化し複離化するに過ぎない)。云ひ換へれば、普通に物と謂はれるものは、考へてみれば、感覺から感覺への關係附けとして以外に嘗て何處にも(感覺の原因的事態と考へられるものに就いてさへも)その姿を現はした——或は考へられた——ことは無いのであつて、それの通常の(經驗し若しくは想像せられる)存在的具體性も、實は暗にそのやうな意味的な關係附けの集約に於いて成り立つてゐるのである。併しそれならば物はそのやうなかたちに自己を全く現實化し盡し得るのであるかと云へば、さうは考へられないのであつて、物そのもの卽ち物の「自體」といふものが、そのやうな經驗的「現象」に對して「實在」的に、經驗に對しあくまで不可到達的に殘らざるを得ない或るものとして、考へられるのであることが否定できない。而も、その所謂物の自體をばさればと云つて身體に關する刺戟的事態の彼方に何らか獨自の存在的規定を以て想像するといふことは、それが實は經驗的「現象」態の暗默の移入であるに過ぎない事情については既に述べたのであるつて、そのやうな想像的な存在的規定も必

ずや具體的には暗に右の如き經驗的意味的關係の含蓄に卽して成り立つてゐるのであるより外ないのである。從つて物の自體、云ひ換へればその「實在」的本質といふものは、結局經驗に對するその不可到達性をば、經驗的「現象」態との間の存在的種別性に於いてでなく、却つて經驗的(有限的)「現象」そのものへの無限の可能性たる點に於いて、從つて又、經驗的「現象」態の存在的直接性(心的性格)、云ひ換へれば現實的確然性、に對する意味的間接性、云ひ換へれば豫期的蓋然性、いふものに於いて、もつと考へられなければならぬのである。

かくて、何らかの感覺的(心的)性質は、他の可能的感覺への約束に卽して外界的に物的であるが、その約束が實は無限であり、假言的命題の形に如何程それを重ねて思ひ描いてみても尙底がある(そのやうに有限に把握された限りの法則からは導き出せないものが殘る)といふことは、實はその法則性の單に所謂約束たる外ない外的性格(內面的現實的生產原理といふものを別に考へて)乃至蓋然的模索的本質の意識として現實化(反映)するものと、畢竟同じものである。云ひ換へれば、純粹にそのものとしては心的である感覺的性質に對し、それを物的ならしめるものとしての物の形式的本質は、前者の存在的(現實的、確然的)直接性に對する意味的(約束的、豫期的、想像的)間接性にあると考へられるが、その間接性に於いて(現はれる「もの」として)、物は心的現前態に關する或る合理化(說明原理)であること既に述べた如くであり、その合理化が——現に意味的間接性として反映してゐる如く——無限の課題性をもつてゐるといふことが、卽ち物の所謂自體的乃至實在的存立の眞意義なのである(既に物化の形に於ける法則性といふものが假言的性格をもつてゐるといふことが、とりも直さず、その現實的確證が時間的に未來に關して單に所謂約束であり豫期であり想像であり知の尙至らぬものであるといふことと同じ事である)。之を逆に云ふならば、

物の自體が若し眞に到達せられるとするならば（物の實質的本質が眞に明らかになるとするならば）、そこに直接的（心的）「現象」態に關する合理化が當然或る窮極に達する筈であるといふことができるのである。

ところで、經驗的に具體的な物に關する――若しくは、その形式的事情が惰性的に保持せられる限りに於いての、科學的な物の觀念に關する――直接的（心的）存在態とそれの背後なる（物的――意味的非存在的）自體との關係が右に述べた如くであるとして、この兩面を一物に於いて卽せしめてゐるものは外ならぬ自覺の反省的連結であるが、而もこの事情は、感覺的性質と物の自體との間に私の身體に於ける生理的過程といふものの介入を考へるにせよ、その介入者そのものについて一種の經驗的物的事象の見られる限り、そこにもやはり同樣に保たれる外ないのであるが、ともかくもそのやうな感覺的性質と物の自體との間には、あくまで私の身體の介入が――私の身體といふ一種の物（の何れかの部分）についての外界的經驗の場合をも例外とすることなく――考へられなければならぬ限りに於いて、その關係が尙或る間接性をもつてゐることが否定出來ない。然るに、行動的意欲と關係的な或る抽象性に於いて外化する感覺的性質と、その背後なる物の自體との關係が右の如く考へられるのに對して、物の外界的存立と或る程度獨立な變樣性をもつ底の具體性に於いて考慮せられる感覺的性質そのもの（心的直接態）への變化の條件的相應性を次第に精密化する方向へ追ひ詰められた物的事象（逆に云へば、それにより合理化せられる感覺的現象態が比較的に最も具體化した段階に於ける物的事象）としての大腦皮質的神經過程、而もそれの原理的に經驗的現象性を超え出るところの――既に述べた如く自らの身體に關しては感覺的性質の（心的）出現によつて遮られる時間的制限に於いて、又他の身體に關する場合にあつても既にその間に自らの神經過程を介在せしめてゐるといふ意味の間接性に於いて、

超え出るところの——所謂自體と、當該感覺的性質そのものとの間の關係は、もはやその間に別に身體的過程の介入といふ如きことを考へる餘地の全く無い意味に於いて、あくまで直接的と考へなければならない事情は既に述べた通りである。

そこでその所謂あくまで直接的と考へられる（物心二態の）關係について先づ考へられることは、我々の自然的傾向が、その物的窮極態（心的なるものとの關係に於ける）に關して、右の如く一應それを超經驗的と云ひながらも、やはり何らか經驗的具體相を惰性的に保持したままの一種の空間的形象をそこに思ひ描かうとし、そのやうな空間性に對してそれ自身あくまで非空間的な心的直接態をば、その意味に於ける互ひの峻別にも拘らず、右の空間的形象の一面に對する反面といふ如き形に於いて如何樣にかそれと卽せしめようとしてゐることが否み難い事實であるといふことである。併し乍ら、すでに原理的に經驗を超え出る或るものとして考へられる物の所謂窮極態に關して、そのやうに本來經驗的由來をもつものとしての一種の空間的形象を思ひ描くといふことは、たとひそこに情性的な自然さはあるにせよ、結局あくまで不合理と云はなければならぬことがやはり否定できない明白な事態であるのである。

元來、物的なるものに對して空間性がその不可分の規定として結びつくといふことに關しては、凡そ空間といふものが感覺的體驗間を仲介する行動的體驗の或る法則的組織（想像的假言的體系）に外ならぬことを考へる時、その場合の所謂物的なるものが、必ず實は經驗的な意味に於けるそれでなければならぬことは明白なのである。既に或る神經過程を介して成り立つと考へられる感覺的性質が、同樣或る神經過程を——或る身體的（運動の）事象の物的自體との間に——介在せしめて成り立つと考へられる行動的體驗との相關に卽して、法則的に互に謂はば豫約的關係に立

つ所に、はじめてかの空間性を本質的規定とするとしての物的事象といふものは考へられる――具體的「形相」に於いて、成り立つ――のであつて、原理的に何らかの身體的事態を介してその外に存立する意味に於いて、それは所謂外界的であるのであるが、之に反して今我々の考へる物のかの窮極態なるものは、そのやうに或る身體的事態を介してその外に考へられる意味の外界物ではもはやあり得ないのであつて、何故といふに、そのやうな外界物の空間的成立といふものが自身それを豫想して立つてゐるところの感覺的性質そのものにそれは直接に――もはや何らかの感覺的性質並びに身體的事態を介することなく――關係してゐる筈のものであるからである。或は逆に云つて、何らかの身體的事態を介してその外に考へられる意味の外界物として扱はれる限りのものは、（たとひそれが大腦皮質的神經過程であらうとも）もはや決してそのまま感覺的性質そのものに眞に直接的な物的事態とは考へることができないのであつて、唯そのやうな經驗的外界物としての把握を原理的に超え出る（無限に彼方なる）或るものについてのみ、その直接性は考へられるのである。卽ちその或るものといふのは、凡そ物を外界的に扱ふこと自體にとつて必ずその直接の條件となつてゐるものとして、それ自身もはや外界的に扱はれ得ないものであり（外界的に扱はれ得るのは高々、別途に再びそれを――經驗の主體に於いて――豫想しつつ行動的處理と關係的な粗笨さを免れないそれの現象態と考へられるものであるに過ぎない）、それに對して何らかの外界的規定を想定するといふことは、從つて本來無意味と云はなければならぬのである。

我々が上述の場合、經驗的外界物の自體に關して、右に述べたやうな感覺的性質間の行動を介する豫約的關係（空間性がそれに於いて成り立つ）が、そこに唯無限的であるとの意味に於いてのみ、それの超經驗性を考へた――その限

り、そのやうな關係を以てその本質とする經驗的現象態との間に、別に存在的種別性を考へなかつた――といふことも、實は畢竟、そこに物があくまでそれの外界的經驗的現象態の一面からのみ考へられてゐたことを意味するのに外ならず、行動を指導すべき理解知に關するとしてはそれが當然であるのであるが、そこにともかくも既に經驗に對する不可到達性が考へられてゐるといふことは、實はその自體の所謂無限性が結局右の如き（身體的行動を介する）意味的關係に解かし切れる（それによつて顯はし盡せる）筈のものであるといふことに對する或る否定的保留がそこに含まれてゐるといふことでもあるのである（自體の現象に對する存在的種別性の積極的主張と共に、兩者の根本的な無種別性の積極的主張も亦否定されなければならぬ）。實際そのやうな關係性に於いて空間的に考へられる物といふものは、あくまでやはり右の意味に於ける經驗的現象態としてのそれであるに止まり、そこには感覺的性質が單に行動的意欲と關係的な或る高度の抽象性に於いてのみ――從つて又それに對して制約的に關係する身體過程への正面的な顧慮をも缺きつつ――扱はれてゐる意味に於いて、物化的合理化過程の或る粗笨な一段階がそこに考へられるに過ぎないのであつて、物の窮極的な自體の本質がそこからは永久的に隱されてゐると考へられることも當然といふ外なく、その自體についてまでも物の（關係的に空間的な）經驗的本質をそのまま積極的に延長することは許せないのである。況してや、そのやうな外界物の知識（具體的規定に於ける存在）が、その構成要素として豫想してゐるところの感覺的性質そのもの（心的直接態）について、それの一層豐富な具體相を顧慮しつつ、それに對して條件的に變化の相應する（それを合理化し說明する）物的事象を、經驗的に次第に追ひ詰めて行つた果てなるものが、更に（その相應性の極度化に向ひ）原理的にそれによつて超出せられる如き或るものとしての、所謂物の（心への）窮極（的直

接）態は、それの或る經驗的現象態に過ぎぬものを條件的に豫想するところの感覺的性質の或る意味的關係に於いてはじめて成り立つものとしての、經驗的外界物がもつてゐると同樣な、何らかの經驗的空間的規定を、たとひ高度の形式性に於いてにもせよ、それに適用することが、もはや全く不合理たらざるを得ないものであることは明白である思はれるのである。――その意味に於いては、神經過程に關する所謂生理學的究明に關しても、對象を外界的に扱ふといふそれの方法上の根本性格に沿うて、たとひ物理學的乃至化學的窮極要素にまでその分析は進められるにせよ、感覺的性質との眞に極度の相應性に於いて考慮せられる神經過程そのものへの闡明としては、そこに何ら決定的な進捗が無いであらうといふことが考へられることに就いては既に述べた通りであり、そこには謂はば知識の次元的乃至階層的な喰ひ違ひといふものが考へられるのである。卽ち、總じて物を外界的に――身體を介し行動を介して――その分析的究明をたとひ如何程進めて行つたにせよ、それによつて物の眞に窮極考へ且扱ふ限りの立場は、的な所謂自體的本質が明らかになるものとは到底考へられないのであつて、そこに明らかになるものは要するに唯、身體的效果から身體的效果への關係といふべき、あくまで外的な所謂現象であるに過ぎないと考へられる（所謂「感覺の消去」に於いてかにそれを間接化してみたとて原理的には同じ事である）。唯その所謂身體的效果の、再びそれ自身そのやうに外界的に間接化したものならぬ、或る直接的內的（卽自的）存立態に關してのみ、感覺との眞に具體的な相應性が考へられるわけであつて、そのやうな見地から神經過程の眞の闡明に、生理學的に外的な方法と異り、寧ろ心的現前態に關する純心理學的反（內）省の立場から入つてゆかうとする考へ方に一理あると考へられることについても亦、既に述ぶる所があつたのである。而もその場合、心的內容の立場からの或る形式的類推に於いて考へられる或る

ものとしての神經過程も、一種の物的事象たるものとしてはやはり當の心的內容そのものとあくまで別に、つまりそれの背後乃至基礎として想定せられてゐるのであること疑ひないと思はれるのであつて、かやうな窮極態に於いてさへやはりそのやうにあくまで區別して考へられる物心二態の謂はば一種の接觸關係といふべきものが、具體的にいかに考へらるべきかが今我々の主たる關心事であり、そこでそれについて以上我々は先づ、その所謂物的窮極態が外界的經驗的處理を原理的に超越する或るものとして、それに對し何らかの外界的空間的規定を歸屬せしめることの全く無意味であり不合理であるといふことを考察してきた次第である。（未完）